

# 章炳麟『疇書』の知識人論（二）

## 「別録乙」篇 訳解と議論

Argument about Chinese Intellectuals in *Qishu* by Zhang Binglin (2)

Translation, Interpretation and Discussion of Bieluyi

福島 仁

Hitoshi FUKUSHIMA

### 総論 『疇書』の知識人論について

学びて優なれば則ち仕えんと言うように儒教の学問は支配者の傍らに仕え、後代には行政官僚となって政治に参画するのが目的であり、実際に孔子とその弟子は政治に携わった。社会の中で武力や血統ではなく、文献と儀礼の知識にたより政治に参画して生活する特殊なグループが生じ、後に広大な統一帝国で莫大な行政要員が必要とされるようになって大いに繁盛した。農業生産ではない頭脳労働によって生計をたてる新しい生き方を孔子は鮮明に意識したから、四體勤めずと言われようが、学べば禄はその中にあり、と断言して、自らを沽んかな、と意欲満々だったのである。孟子が心を勞する者、と強調するのも知識階層の出現を予見したのである。孔子の学校が人類史のごく初期に知識によって社会に参画する集団を生み、中国社会の士大夫とか読書人の種子となったことが後代の中国社会の特性を大きく規定することになるのだから、孔子の功罪如何が時々の中国の自己評価と切っても切れないことになる。

だが、孔子は自分の道德や施政の基準に合致しない場合には、道なくんば則ち隠る、と政治の舞台から退出するのが原則とした。邦に道あらば、道なくんばという道はそれを言うのであろうが、個人的な感覚でもあるので、曖昧な基準であったから、後には融

通無碍に変化していく。孔子は故国を離れた十四年間に基準に合致した邦や為政者との出会いがかなわなかった。孟子も結局、用いられずに著述と教育に携わった。つまり原則を発揮すると就職が難しくなる。多くの場合は権力者の意向に沿うのが処世の道であり、さらには竈に媚びるのが通常のあり方となって、理想政治実現の孔子の原則とは大いに背馳することになる。資産家でもない大多数の知識人にとっては仁を求めて仁を得て餓死する訳にもいかないから、内心の原則は側に置いて、ひたすら現実の君主に追従を重ねる。次第に原則が現実に腐蝕され変質して都合よく改変されていくこととなる。ところが世の中には忠君を貫く思想家がいて、時折、君主への忠誠を絶対化して他者にも強要する。理想と現実とは背馳し、摩擦が起きる。

さらに五胡十六国の異民族の支配以来、蛮族を君主に頂く場合、あるべき君主像とは食い違う君主に仕える事態が生じる。もっとも孔子は九夷に居らんとしたり、実際に荆蛮とも言われた楚に向かったことから、夷狄の君主を拒絶したわけでもない。章炳麟が一番に推す荀子は楚に仕えて、魯の故地を管轄する、いわば占領地の行政官となった。孔子や荀子は理想の実現に重きをおいた可能性もあろう。しかし、宋代以降、現実の情勢から、華夷の別や夷狄への反感と君臣関係の問題が重なりあって、議論されるようになった。章炳麟の知識人論も種族革命を取り上げるにあたり異民族の君主への忠誠と清朝支配下での知識人の役割が論点であり、変わるところがない。

雑誌篇の冒頭では学隠篇を引き継いで、李光地を焦点とする以下の議論の序論となり、別録乙篇の終わりで否定的評価が下される。李光地はいわば主役といえるが、もちろん彼個人だけではなく李光地を典型と見て取れる知識人の処世を攻撃するのである。

雑誌篇は初刻本と変わりが無い。鄭成功、辛棄疾、曾国藩は袁清史篇の「中国通史目録」では別録の伝記を立てられるはずであっ

た。鄭、辛は異民族への徹底的抵抗者であり、章炳麟ならずとも注目する対象だが、やや章氏の独自性が現れているように思う。曾国藩は清の中興の最大の功労者であるけれどもその彼を消極的協力者と指摘する。強弁が過ぎるのはモンゴルの定宗没後三年間、汗が空位だったことから、二百年の清の統治が無効であり、その間も孔子の末裔を共主と仰ぐ漢民族の中華支配体制が続いていたかのように言うことである。汗が空位の三年間もモンゴルの北中国支配が続いたというのなら九十年間漢民族は元に服属したのであり、同じく二百年間清に服属していたことが疑いない。共主を日本の天皇のように見なして、種族革命のよりしろとする意図ははなはだ説得力に欠ける。雑誌篇の終わりでは礼教を保存する知識人の役割と君臣関係より優先する親子関係が言及され、別録篇の議論へとすべりこんでゆく。

別録甲篇ではまず揚雄の処世に朱子とは違う見解を示す。『通鑑綱目』漢の天鳳五年の「莽大夫揚雄死」の目には『資治通鑑』にはない、「秀が事件に連座して処罰され雄に言及されたとき、雄は天禄閣の上で校書をしていた。使者が来て捕縛しようとする」と、雄はのがれられないと思い、閣上から投身して瀕死となった。王莽はそれを聞き、雄は実状は知らないで命じて不問にした。しかし、雄が書いた法言では末尾で王莽の徳が伊尹や周公と等しいと誉めそやした。さらに後に劇秦美新の文を書き王莽を讃えた。君子はそれを非難している」という付け足しがある。司馬光は揚雄を批判していないから、朱子が明確に非難したことは疑いない。章炳麟は篡奪者王莽におもねながら内心のわずかな領域で批判的精神を残す揚雄を知識人の処世の現実的な一典型として容認している。ほとんどの中国の知識人は権力者に追従していくことが様態の常であるから、それを現実として措定し、次の議論に進むのである。

顔之推は次々に君主を換え、逃げ出した異民族王朝の北周にも

最後には仕えた。しかし、蛮族に迎合する教育を息子に施すことは拒否した。錢謙益は短期間、清に出仕したが、鄭成功の北上を待ち望み、永曆帝の死を悲しんだ。私財を費やして反清活動の軍資を給した結果、莫大な負債を負った。錢謙益は貳臣としても知られるが、章炳麟は表にでない彼の清に対する抵抗を知り一定の評価を下している。顔、錢両者はいわば異民族支配に対する消極的抵抗者である。鄭成功や明の遺老が清に対する積極的抵抗者であろう。積極的抵抗が難しい清朝支配下では錢謙益の処世が選択可能な道となる、と章炳麟は考えている。

別録乙篇では異民族支配に対する協力者がその協力の程度と特性に注目して議論される。許衡は元の国家制度の大略を定め、多くの政策を上奏して漢民族を支配するのを助けた。一方で漢民族の生存と生活を保護するために方策を尽くした。魏象枢は言葉を偽り、三藩撤廃を阻止し、漢民族の領域を存続させようと企てた。この両者は対敵協力者ではあるが種族の意識を内心に保持し種族の利益を計ったといえる。

魏裔介は清朝の為に三藩壊滅を献策し、満州族の利益を計ることにより、自らの昇進を果たしたのは魏象枢と逆である。湯斌は清官として知られ民衆の利益を守護する優れた官僚であり、一面儒教の理想を実現している。彼が蘇州を離任するとき人民は泣いて止め、三日仕事をやめ道で香をたいて送ったという。しかし、官僚として治績を上げることは清の支配体制を強化することでもある。章炳麟は内心に抵抗の意識を持たない走狗と見なした。李光地は明の滅亡、台湾鄭氏の打倒、それだけでなく漢族民衆に対する清軍の殺戮や略奪にも積極的に参与して立身を果たし、康熙帝の側近を勤めた。自らの利得のために種族の利益とは対立する積極的対敵協力者として生きたのだと章炳麟は断罪した。魏、湯、李三者はみな性理学の著作を残し、世間的には学者として名が通っている。章炳麟は末尾で儒教を利用して一己一族の利益や犯

罪を行う事例と見なした。しかし、引用が『莊子』の文であることからわかるが、經典に頼り政治に参画して生計を立てる儒学者が原初からもつ本性が負の方向に現出したのにすぎない。

ここの三篇では章炳麟の主張する種族革命と漢族の知識人、官僚及び彼らが保持する理学思想との交錯が焦点である。本文中で言及された三綱は三者が同じ性質をもっているわけではない。父子関係は天然自然の所与の人間関係である。夫婦は天然自然ではなく後天的だが、これを基礎として血縁関係が生じるので、強いつながりをもつ。ところが、君臣関係は官職を与えられ出仕する事の対価として奉仕と忠誠が返される。原理的には退職すれば関係が解消されうる。ただし、個別の君主が忠誠の対象になることはむしろ少なく、一代の王朝にむかう忠誠を求められる。こうなるとさらに生き生きとした人間関係の様相は薄くなる。儒教道德も家族血縁の関係が基本であり、つまり君臣は二次的、派生的関係であった。章炳麟のより所とする種族は父子関係の自明の延長拡大であるかのように言われているが、事実として血縁ではないのだから君臣と同様に二次的な空想的な関係である。君臣より重大で根元的だと主張するのは容易でない。清朝の支配体制はほとんどが漢人官僚に支えられていたが、彼らは種族が君臣より優越するという考えは決してもたなかった。戊戌政変の際に袁世凱は変法運動を裏切り、自立軍蜂起失敗の後に張之洞は蜂起参加者を処刑したのは漢人大官が種族の意識より、清の国家社会体制の維持を望んだ現れである。官僚だけではなく一般人民も清の支配下で安居楽業していたのであって、種族革命を望んでいたのではなさそうである。章炳麟は漢人官僚の内心に潜むと考えた錢謙益が持ったような抵抗の意識に基づいて、種族の意識を現実化して革命に導く目論見であった。種族の意識が空想にすぎず種族革命の実現はきわめて望みが薄いことはこの当時現実が章炳麟に突きつけていたはずであり、この三篇の知識人論が著されたときはすで



に破綻していたと言える。

## 鳩書

別録乙 第六十二 許衡、魏鑑枢、魏裔介、湯斌、李光地について

(1) 許衡、字は仲平といい、河内の人である。若いころ金と元との混乱に遭遇し、避難したときに河陽を通ったが、ちょうど暑い盛りでひどくのどが渴いたのため人々は争って道ばたの梨を食らった。衡は木陰でじっと動かず、「社会が混乱し、梨の持ち主がいなくても、我が心に主がないというのか」と言った。混乱がやや治まると黄河と洛水のあたりを巡り、柳城の姚枢に従学して、宋の二程と朱熹の書物を手に入れた。そのまま蘇門山に定住し、礼楽、天文暦学、軍事刑罰、経済、水利の典籍を幅広く考究し、また道は自分が担う、と大きなことを言っていた。葬祭や結婚は必ず儀礼に従い住民を指導した。従学者が徐々に増えた。

(2) 元の世祖フビライが陝西を支配すると京兆提学に招聘し、皇帝に即位すると太子大師に任命し、国子祭酒に改職した。至元二年に上訴して述べている。「以前に北方の中華を保有した者は常に漢民族のやり方を実行したために長く続きました。だから後魏、遼、金は年数が長いのです。他のそうできなかった者はすべて混乱し亡国がやって来ます。そもそも陸上に行くには車が適し、水上に行くには船が適していて、反対だと進めません。河北では冷たい物を食べ、四川では熱い物を食べますが、逆だと必ず体に変調をきたします。これから言うと、国家統治は漢民族のやり方を実行すべきなのは疑いがありません」。上奏されるとフビライは採択した。六年、大常卿の徐世隆と朝廷儀礼を制定し、大保の劉秉忠、左丞の張文謙と官僚制度を制定した。七年、中書左丞に任じられた。八年、集賢大学士兼国子

祭酒に転任した。十三年、元の官職のまま太史院の業務を管轄した。十八年に没し、諡は文政である。

【解】「京兆提学」は徐注がいう京都の学ではない。京兆府、つまり今の西安、の学官である。『元史』巻158、許衡伝に「甲寅の年（1254年）世祖は秦中に進出した。姚枢を勸農使にして民に農耕を教え、一方、秦人を教化する方法を考えて衡を召して京兆提学とした」とある。

「太子大師」は上記の許衡伝では姚枢に授けられ、許衡はこのとき太子太保を授かった。

「諡文政」は徐注で章炳麟が『檢論』では文正に作ることを指摘する。『元史』でも同じで、これは章氏の誤記であろう。

(3) 衡は二十余年間出仕したけれども、常に政治に参加したのではない。元一代の制度は大体、彼の発議により、上奏する場合には幾度も古の道義に基き論難した。しかし、宮中から退出するとすぐに草稿を廃棄したから、彼の発言の多くは秘密のまま伝わらない。元が宋に侵攻しようとする時に、衡は徳により外国を平定し、軽々しく武力を使用しないようにと請願したが、聞き入れられなかった。死に際して、僧服を着せて納棺するよう遺言した。世間では後漢の荀彧が篡奪を阻止できず、服毒自殺したことになぞらえている。

(4) 魏象枢は字が環極で蔚州の人である。清の順治三年の進士である。刑科給事中から各科に転任して八年に及び、廉直で事件について直言した。大学士の陳名夏が罰せられたが、言官は怠慢にも事件の前に糾弾しなかったとして六科の長官はみな罪を問われた。象枢は詹事主簿に降格され、しばらくして光祿丞に転じた。十六年、扶養のために辞職し、家で人間論と天理の学説を議論していた。母の死に際し、喪葬は古の儀礼を遵守する

と表明した。

- (5) 康熙初年に招聘され御史に任命され、順天府尹に転じた。ちょうど呉三桂が湖南、四川、雲南、貴州に拠り反乱し、領土を奪い取り皇帝を称した。仁帝玄暉は象枢に下問した。象枢は「堯や禹の軍事力は、宮殿の階段で干羽の舞を行ったために七十日後には苗族が帰順した、のです。もともと三藩の撤廃を企てたのはミンジュとミスハンであり、今や情勢は大混乱しているので、この二人の家臣を処罰して諸藩に謝罪すべきです」と答えたが、取り上げられなかった。後に刑部尚書になり自宅で亡くなったのは康熙二十五年であった。敏果と諡された。

【解】「舞干羽於兩階」は偽孔伝では「文教を修め明らかにし、文舞を賓主の階段で舞って武力行使を抑制した」とあるのに従えば、魏象枢は三藩撤廃を阻止しようと意図したのだと考えられる。

- (6) 譚献は言う。三桂は反乱した臣下ではあるけれども本来漢民族だ。漢民族が領土を分有していれば、王土は幸い満州族に完全支配されていない。だから、象枢は曖昧な言葉を使いお上を欺いた。つまり、漢の董卓が大規模に軍を動員して山東の勤王の義勇軍を征討しようと協議したとき、鄭泰が「政治で重要なのは道徳性であり、軍の多数ではありません」と言った。劉表が分を越えて天地の祭を行おうとしたとき、孔融は「しばらくはお控えになり国防を充実されるよう」と考えていた。和光同塵したのはこの二者と象枢とは同じである。そうしなければ雲南の軍勢もひどく愚かではないから、帰順を求めるはずもないからである。

【解】譚献は章炳麟の師筋にあたり、何度も両者は会見している。この発言はそのとき直接、譚氏から章炳麟が聞いた言葉かもしれない。



「和光同垢」は本当の意図を隠して実現することをここでは意味するから、徐注の引く『老子』王弼注の突出した事をしなければ争いもない、という解釈ではなく、河上公注の獨見の明をもっているそれを和らげ、闇昧にして曜乱させないようにすべし、という解釈に近い。

- (7) 魏裔介の字は石生で、柏郷の人である。清の順治三年に進士になってからは十一年で左都御史となり、さらに二年後には太子少保を追加された。

- (8) 当時、明軍がしばしば侵入攻撃していた。裔介は上申した。  
「現在、劉文秀が四川南部で再起し、孫可望は貴竹に根拠をおき、李定国は広西で隙を伺い、張名振は島嶼地域で活動していて、何年も討伐していますが、まだお上は制圧に及びません。当面の計略としては四川は雲南、貴州の入口です。四川を守備できれば雲南と貴州の勢力は弱まります。ですから、四川をまず攻略せねばいけません。広西はわずかに弱いですが、桂林の戦闘は本格的に開始されていないので、必ず再び侵入して湖南の軍隊を牽制しようと計画しています。藩鎮に命じて順番に出撃し、機を見つつ防戦すべきです。この三方面では隙を突いて攻撃するなら、広西を先にし、広西が壊滅すれば、雲南も貴州も瓦解します。海上では見張りを厳重にし、軍艦を建造し、諸路が一緒に掃討して、事態が長引き異変が生じないようにすべきです。」その後の諸道の軍の進撃は結局、裔介が計画したとおりで、ついに明を亡ぼした。雲南が平定されて、裔介は言った。「雲南、四川、湖北一帯は満州兵を駐屯させて守備しないと武装勢力が蠢きだす心配があります。荊州と襄陽とは国の重要拠点であり、將軍を選拔し数千の満州兵部隊を率いその地に常駐させ、事変がないときは情勢を管理して、姦民を除去し、

事変が生じ応援に赴く場合には水上陸上移動の優位に頼るよう  
にすべきです。」この議論は実行されなかったが、彼が満州王  
朝のため漢民族を分断支配することを企んだのはまさに「国家  
の基幹を担う家臣」といえよう。

(9) 康熙元年に吏部尚書に転任した。三年に保殿大学士に任命さ  
れた。二十五年に没し、文毅と諡された。

(10) 裔介が前後数度にわたる建白において満州族と漢民族との間  
で時には駆け引きをすることがあったが、行き着くところはす  
べて満州政府の利益となり、子孫帝王の永続的統治の計略を立  
てた。彼の本性は臨機応変で、物事の対処がうまく、魏象枢に  
先立ち望みを達成したが剛直さでは及ばない。しかし、さらに  
『聖学知統録』『論性書』『希賢録』の数種の著作があり、自分  
では人間の本質をとらえたと思っていた。

(11) 湯斌は字が孔伯で睢州の人である。母の趙氏は明末に李自成  
の賊を罵りつつ死亡した。斌は年若く衢州に避難した。清の順  
治九年に進士になり、潼関道に地方勤務となり、嶺北道に転任  
した。鄭成功が長江一帯を支配しつつあり、雩都の山中にはも  
と明の將軍である李玉庭がいて、一万人を配下におき、表向き  
は湯斌を訪れて降伏を約束していた。成功は南京を包囲したあ  
と、スパイを贛州に派遣した。斌はスパイを捕らえ殺したが、  
玉庭は裏切ろうとしていると推測し、兵力を移動して南安を防  
衛すると、玉庭はその通りやってきたので撃退し、兵力を分け  
て退却路を遮断して、ついには玉庭を処刑した。その後、病氣  
退職を申請した。

【解】 湯斌の母の最期は孫奇逢が「湯母節烈伝」（『夏峰先生集』巻  
五、中華書局、2004年）で叙述している。

李玉庭は未詳。

- (12) 斌は役人としての能力が優れているだけでなくつきあいも上手で、大学者たちと知り合って自分を偉く見せようとした。孫奇逢が夏峯で講義していると聞くと、出かけて行き、十年間教えを受けた。さらにかつて黄宗羲と問答のやりとりをして「黄先生の学問は偉大な禹が山河に道筋を付けたようにはっきり脈絡があり、我々若い世代の目標です」と言っている。けれども、根本の意図はそれによって名声を高め、出仕したとき役人仕事の飾りとするためであり、それゆえ一生涯自ら学問で獲得したことはない。特に剽窃が巧みで、朱子と陸象山とを調和して自分の上辺を飾りたてた。そして俗世間では煽り立てて大学者だとして、少しずつ正義の軍勢の勝利を阻止したことを忘れてしまった。

【解】湯斌と黄宗羲との問答の引用部分は『南雷詩文集付録』「交友尺牘」（『黄宗羲全集』第11冊、403頁）にある。

- (13) 康熙年間に制科により侍講に任じられ、江南巡撫に昇進した。斌はもとから儉約で、官職に就いてからも粗麻のベッド覆いだけを使い、野生のナズナをとって豆スープに混ぜ食べていた。息子がニワトリを買ったと耳にして、怒って下僕を鞭で打った。公孫弘が綿なし布団を使い、玄米飯を食べていたこともこれを越えるものではない。一方、このことで佞臣のミンジュと王鴻緒とにより中傷されても、結局害は被らなかった。やがて礼部尚書兼輔皇太子の職で、仁帝玄暉の前で応答し、面と向かって欺いて、退出すると、「普段ここまで人を欺いたことはない」と言った。玄暉はそれを聞いても罪に問わなかったが、ただ「理学が本当に崇高であるなら、いまは嘘を貴ぶのか」と言った。

- (14) しかし斌は役人仕事に長けていて、江南巡撫を勤め、明の万暦の時に課せられた戦費増税を免除し、蘇州府と松江府の数十万両の租税を免除した。さらに「国家的慶事やあるいは水害干ばつが生じた場合、愚か者は逆に急いで徴税し後で税の減免を施すものだが、必ずあらかじめ次の年の地租を免除しておけば、人民は欺かれない」と言っている。先に一年の地租を免除する頒諭はここから始まった。潼関に在任のときには訴訟の処理に遅滞がなく、任地の五十里一帯では審理を待つ者は宿泊のために食料を持たなくてもよかった。かつて外出したおり雨に遭い大木の下に宿ったことがあり、民衆はこの木を垣根で囲い記念とした。つまり任地で名声を残し、これは彼の優れた点である。康熙二十六年に工部尚書に転任した。木材の伐採のため通州で没し、文正という諡である。道光年間に孔子廟に従祀された。湯斌は職務に忠実な役人であり、飼育された家畜は昔を忘れてしまうので、職務を任せられるだけだ。

【解】「万暦時所加餉」は地方の反乱鎮圧などの費用に臨時に課される増餉である。万暦年間には特に豊臣秀吉との戦争のため過大に増税された。

- (15) 章炳麟は言う。「教えるべきでない人を教育するのは盗賊に食料や武器を与えてやることである」。孫卿のこの発言はまことに意味深い。ああ、孔子が宰予を教えて失敗し、田常に対し反乱した、と世に伝わっている。孫氏と黄氏も湯斌に関してはやや注意を怠ってしまった。

【解】「孔子已失諸宰予」を徐注では授業中の居眠りのことを指すと考えるが、そうではあるまい。明らかに宰予が反乱を起こす素地があったにも関わらず教育した失敗をいっている。しかし、崔述『洙泗考信余録』巻二によると反乱したのは別人であり、『史記』が誤りとする。

- (16) 李光地は字が晋卿で安谿の人である。漳浦の黄道周の学術を修め易占が得意だった。ちょうど康熙帝は朱子学を尊崇していたので朱子学で有名になった。彼の学業は時流とともに移行いき、その時に律暦が重視されると『九章算術』や幾何学をやり、訓詁が重視されるとちょっと古籍を整理するし、『文言伝』の奥深さが重視されると『周易』と『中庸』篇に薄っぺらな解釈をして、果てしもない議論をした。けれども数学には通じていて結局はそれでもって君主の歓心に迎合し、名宰相と呼ばれた。
- (17) 康熙九年に進士となった。三年後翰林院編修の職位で休暇を願い出た。耿精忠が福建を根拠地とし、鄭經とともに人を遣わし招聘したがどちらにも加わらなかった。そのとき編修の陳夢雷は精忠に脅迫されいつも病気を理由に対応していたが、情勢が窮迫していたため光地に密かに報告した。光地は使者を抜けど道を通して首都に派遣し、蠟丸の中に入れた上奏文を奉った。仁帝玄暉はそのとおり命令した。その時、康親王ジェスはすでに衢州から仙霞関を落とし、進撃して建寧、延平を陥落させて、精忠は降伏した。光地は侍読学士に任じられた。鄭經の武将の劉国軒が海澄、漳平、同安、惠安の諸県を攻略し、泉州にせまり、萬安と江東の二つの橋を落としたため、南部と北部の協力が絶たれた。光地は叔父の李日烺に百名あまりの民兵を指揮して石珠嶺をこえ、木橋を保全して渡ろう派遣した。それ以外に、弟の光垵と光垠とに命じて千名の民兵で白鴿嶺を越えて、巡撫の呉興祖の軍を永春で迎えさせた。軍は泉州に至り、国軒の軍を打ち破った。それで翰林学士に転じた。当時、福建の部隊は王が一人、ベイセが一人、公が一人、伯が一人いて、將軍や都統以下みな本營を設置し、指揮下はすべて中央直属正規軍部隊であり、民衆に寄食し、しばしば壮丁を捕らえて使役するし、無数の婦女を強奪したから、福建の民衆数万が北へ逃げ出



したのだが、これはすべて光地が軍隊に協力したせいである。

【解】「蠟丸封事」の内容は『清史稿』巻 262 の李光地伝にみえる。

現実の作戦はこの通りには進まなかったが、康熙帝がその忠義心を高く評価した。

「白鴿嶺」は永春県の東端に位置する。

- (18) このころ鄭經が没し、息子の克塽は幼く、武將たちは内部抗争した。夷狄も漢民族も台湾は風波が險しく、武力行使しようとするものがなかった。ところが光地は折りよく首都に来て、すぐ攻略して災いを後に残さないように、かつ帰順した明の旧臣の施琅を推薦して登用すべき状況を力説した。玄曄はその言葉を採用した。二十二年にとうとう台湾を攻め落とした。それからは明の子孫と中国の正朔と礼俗を尊重した人々は後継者がいなくなった。

- (19) 光地は知謀をつくし中国の再生を根絶したため、功績は高く、格別な厚遇を蒙ったが、他方陳夢雷は賊軍として降伏したので斬罪となり、光地がすこし弁護して死を免れた。夢雷は光地が自分の功績を横取りしようとしてジェスに正直に告白せず、自分を罪に落としたと考えて、怒って手紙を書き絶交した。世の中では光地が友人を売ったと言われた。

【解】李光地は陳夢雷とのこの件について『榕村続語録』巻十で詳細に経緯を語っている。もちろん、彼自身の立場を弁解しているのだが、当時の情勢が清側、耿精忠側あるいは鄭經側いずれに組しても危険であり、綱渡りの行動をせざるをえないことがよく示されている。

- (20) 光地が朝廷にあったときから君主とは互いに思いやり、喜びを共にし、文淵閣大学士に出世した。玄曄は三角関数に理解が

あり、一方、朱子学を好んだので、光地はそれを推し量り問いに答えることができた。そこで玄曄は応対を記録にとり御覧に供する事を命じ、さらにしばしば朱熹の書籍を校訂させ、常に「光地は朕が一番よく知っているし、朕については光地が一番よく知っている」と語っていた。光地は厚かましく大学者だと自分をひけらかしていたけれど、文章表現の深さは魏、湯には及ばないし、発言は極めて浅薄なものがある。彼の『榕村語録』に「周、程、張、邵は朱子がいなかったなら、これほど名声高くはないと思う」と言う。現在まで学者たちは聞き伝えて笑ひ者になっている。楊名時、李紱、陳鵬年、蔡世遠、惠士奇、何焯は正しい名望徳行によって光地が知り抜擢したから、後にも称賛し続けた。けれども何焯だけは光地に心酔していたものの、他の人々はみな実状を認識していた。

【解】康熙帝の李光地評は『清史稿』巻262にある。李の死後に閣臣に告げたのである。

『榕村語録』巻十九（『榕村語録』中華書局、1995年、332頁）にほぼ同じ発言がある。この発言の本来の文脈での意図は置いて、世の学者が笑ひ者にした理由を考えると、李光地が自分は朱子の位置を占めるとほめかした、と受け取られたからであろう。

- (21) 光地は若い頃から善い行いが無い。後に順天学政を管轄したとき母が死に、命に従い喪礼に違反した。光地は九ヶ月の休暇を申請し、喪礼を執り行なった。給事中の彭鵬は同じ福建人であるが、光地は親をないがしろにし官位を追い求めたと弾劾し、また自分がふだんその悪と嘘を知るさまを述べた。さらに好色で、かつて良家の子女を奪ったことがあり、全祖望が記している。五十六年に没し、文貞と諡された。

- (22) 章炳麟は言う。莊周には「儒者は『詩経』『書経』にのっと

り墓を盗掘する」という言葉がある。宋代の人が道学を言い出してから、宋人はもと道学と呼んだが、後に理学と分けて言い、最後にまた心学が分かれた。道学は本来、心理学、修身、倫理学の三学科をかねていて、その語は他の二者に比較して統合となっている。近頃ではすべて理学というのは誤り。明の学者が祖述した。宋、明の学者の实际的でないことが多く、明末の陽明学もかなり盛行したが、しかしそれも心学の一部にすぎない。清の学者は偽りが多い。元と清では許衡と魏象枢だけはまだ深い悲しみから故国を思った。魏裔介から後、不正なことを考えて祖国を転覆させたのは、あの公山不擾さえ恥入るほどだ。ただその行いは世を経るにつれますます低劣になり、裔介は議論で利を求めるのに汲々とし、斌は騙したり、儉約を見せかけたりし、光地の淫行に至った。宋、明の学者たちの正義を行う努力が、今やかくもおろそかになったのはどうしてか。それは孫卿が死して儒学は絶えてしまい、明末の五君子が亡くなってからは、孫奇逢、王夫之、黄宗羲、顔元、李顥をいう。道学も滅びてしまったからだ。

【解】「孫卿死而儒術絶」以下は、当然、『漢書』藝文志の「仲尼没而微言絶。七十子喪而大義乖」をもじったのである。